

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月27日現在

機関番号：32204

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01880

研究課題名(和文)「間主観性」からみた日本人母子の愛着の実際－0歳から3歳までの縦断的研究－

研究課題名(英文) A longitudinal study of the attachment of the Japanese mother and infant from the viewpoint of "intersubjectivity"-from 0 to 3 years old

研究代表者

伊崎 純子 (IZAKI, JUNKO)

白鷗大学・教育学部・准教授

研究者番号：00341769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、関係性障害の予防的介入を目指し、就学前の母子関係における基礎的なデータを収集することにあった。研究参加者14組の母子のうち、生後4ヶ月、8ヶ月、1歳、1歳半、2歳後半、3歳と発達のターニングポイントで縦断的に追跡できた7組の母子の映像を本研究の分析の対象とした。分析の結果、多くの母子は生後4ヶ月で特有の応答パターンを有し連続性を保つが、一部の母子の応答パターンは3歳までに変容し、環境の変化の影響との関連が推測された。5組が参加した4ヶ月未満の研究から予防的介入時期は生後2ヶ月の時が合理的だと考えられるが、一般化することは今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生後4ヶ月の母子相互交流において(1)母は言葉よりも身体接触を好み、(2)個々の母子特有の応答パターンを有し、(3)対面する乳児は視線を回避しやすく、第三者がいると生気情動を活性化させることを先行研究の傍証として再確認できた。新たに(1)生後1ヶ月では母の胸に収まり内的な感覚に注意を向けているが、徐々に外界の刺激に反応する移行期を経て、生後2ヶ月では関係性に相互性が出現すること、(2)3～4ヶ月では抱く・抱かれる姿勢に変化が生じ、乳児が周囲の雰囲気を感じ取った時の母子の姿勢を「カンガルー抱っこ」として注目できること、(3)3歳までに関係性が変容した事例では環境変化に影響との関連が推測された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to collect basic data of preschool children and their mother relationships, with the aim of working out a preventive intervention system of relationship specific disorder. We have the 14 pairs of mothers and children as subjects. The 7 pairs of them are analyzed, who participant through four months after birth, eight months, one year, one and a half year, two years of age and three years of age. As a result of the analysis, many mothers and children have a unique response pattern in four months of age, but some mother and child response patterns have been transformed to three years old. We suppose the effects of environmental changes as a reason. It is considered that the time of two months after birth is rational for the preventive intervention period, but it is a issue in the future to generalize it because the data from the study of five pairs of less than four months of participation.

研究分野：臨床心理学

キーワード：間主観性 母子相互交流 縦断的研究

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 我々は医療・教育・福祉領域における心理臨床活動を通して、幼児期から青年期にかけていじめや不登校、不適応に関わる問題の多さを痛感している。個々の事例に対応しても発生数そのものを減らすことは叶わない。これらの事例では乳幼児早期から「育てにくい」「赤ん坊が可愛くない」などと母親が子育て上の苦悩を訴えていたケースが少なくない。これらの早期関係性障害(疑い)の予兆サインに対し、予防的介入を行うために「社会性や感情の発達」「自我発達」という観点から乳幼児期の支援に関わる研究の必要性を感じた。

(2) わが国において、乳幼児健診は母子保健法に基づき、三歳児健康診査と1歳6か月健康診査が実施されているほか、98.8%の市町村において3～4か月健診が実施されている。9～10か月健診が77.5%とそれに続く(厚生労働省,2015)。現在の乳幼児健診の主眼は、身体・運動発達及び言語の発達チェックにおかれ、身体測定、運動発達、股関節の動きのチェック、離乳食指導等が行われている。乳児家庭全戸訪問事業も含め、これらの場で関係性障害の予防的スクリーニングと介入が具体的になることは精神保健上の予防的介入に有効ではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

(1) 第1期(2014年～)において、日本の母子相互交流を生後4ヶ月、8ヶ月、1歳、1歳後半、2歳半、3歳と発達のターニングポイントで縦断的に追跡し、間主観性の視点から日本人にみられる母子の応答パターンを明らかにし、母親不在時の児の反応から母に対する内的表象の成立過程を縦断的に観察することを目的とした。

(2) 予備研究より、4ヶ月では母子のやり取りで視線回避が多く、母親表象の内化は未獲得と考えられ、8ヶ月では多様な行動で母親不在の状況を打破しようとし、その際の母子の応答パターンは1歳でも継続しているように思われた。そこで、早期介入開始は8ヶ月が適しているという仮説を立てたが、第1期の研究を進めた際に、生後4ヶ月ではすでに個々の母子特有の応答パターンが存在することを確信し、生後8ヶ月での介入では遅いのではないかと考えた。そこで第2期(2016年～)では、家庭における定点観測を生後4ヶ月以前から開始し、母子の応答パターンが特徴を持ち始める様子を縦断的に観察することを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 研究参加者:白鷗大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認(承2016-01)を得た同意書を用いて研究に同意した研究参加者を対象にしている。第1期は、まず基礎データの収集を目的に機縁法に基づき、研究参加者を募集した。現在までに8組(男児3名、女児5名)が生後4ヶ月の撮影に参加した。2歳半～3歳まで追跡できたのは7組(男児3名、女児4名)である。第2期は、第1期の結果を踏まえ、生後1ヶ月からの母子の関係性の発達について第1期よりも高い頻度で観察することを目的として新たに研究参加者を募集した。現在までに5組(男児4名、女児1名)が参加し、現在0～2歳になっている。

(2) 手続き:第1期はGratier(2013)を参考に大型の鏡とバウンサーを準備し、生後4ヶ月の乳児を可能な範囲でバウンサーに座らせ、母に対する教示として、「赤ちゃんとお話してみてください」「言葉を使ってあやしてあげてください」「歌を歌ってあげてください」「赤ちゃんをあやし、普通に遊んでみてください」を順不同に用い、教示の前後から母子の様子をビデオで撮影した。撮影した全てのビデオの内容・家族の背景・観察時の様子等を記述し、研究者2名で協議し、それぞれの母子の特徴的な場面を特定した。さらに、母子の間に観察者あるいは父親が入った時に乳児が生き生きするように思われたため、母子の遊び場面と父親あるいは観察者も一緒に三者場面が撮影されていた乳児3名については追加して生気情動(Stern, 1985)の図示も試みた。生後8ヶ月では、大型の鏡を用い、「いつものように遊んでください」と教示し、自由遊びの後で母に「少しだけ隠れてください」と教示し、短時間の母子分離の課題場面の撮影を行った。生後1歳と1歳後半では、ストレンジ・シチュエーション法(Ainsworth et al, 2015)により愛着関係を撮影した。生後2歳及び3歳では、社会性の発達を見るために月齢の近い子どもを2～3人のグループとして子どもの自由遊び場面を撮影した。母親らは、同部屋の子どもの見える場所でグループでの話し合いと個別に母親の世代間伝達の問題を探るための、我が子への感情と母親自身の原家族についてインタビューを行った。

第2期は、生後1～4ヶ月まで週1回から隔週の頻度で撮影し、生後4ヶ月以降は、第1期と同様に、生後8ヶ月、1歳、2歳における行動の様子を撮影した。第1期の教示のうち「赤ちゃんをあやし、普通に遊んでみてください」のみを行い、母子の様子を撮影した。教示を絞ったのは、第1期の結果、音声での関わりを要求する教示では母親が緊張することがわかったためである。

### 4. 研究成果

本研究に参加したケースは中断したケースも含めて14例に届いたところであり、今後も観察例を増やすことと観察を継続することが課題である。以下に統計的な手法での検討が難しい少数例のケース報告から得た、関係性障害の予防に重要と思われる主な結果を3点挙げる。

関係性の発達には質の連続と一貫性がある

1歳時の母子の愛着パターンと生後4ヶ月時の母子の相互作用のパターンには関連があり、生後4ヶ月における母子の間主観的な関係性は十分に発達しているといえよう。また乳児は生後4ヶ月で母との間で獲得した関係性を、自分と波長を合わせタイミングよく関わってくれる第三者との間でも展開した。生後8ヶ月では応答性のあるやり取り関係を求める気持ちが十分に発達しており、周囲からの応答性が不足するとぐずったりイライラしたりする一方で、母からカンガルー抱っこ（背中に母親を感じて前向きに抱っこされる姿勢）をしてもらうなど安心感が伴うならば、積極的に外界への探索を行うことができた。1歳までに安全基地として母を使い、母の不在に対して悲しみを表現し、母の元で急速に陰性感情を処理できた幼児は、2歳以降で人の輪の中に居ることを楽しみ、母から離れて自分の遊びを展開することができた。一方で1歳の時に不安定な愛着を示した幼児は、2歳で誰にでもマイペースに関わり困っても母を頼らない様子を見せ、3歳の時点で母への後追いが見られた。

乳幼児は環境の影響を受けて関係性を内在化させる

生後1歳の時点で安定型の愛着を示した幼児が3歳の時点で不安が強く探索行動が非常に萎縮し、母以外の他者との関係が不安定な愛着な関係性へと転じた例があった。この背景には、1歳から3歳にかけて家庭の都合により不定期の無認可保育園利用や認可保育園への転園、幼稚園への転園と日中の生活の場が繰り返し変わったことと関係があるのではないかと推察された。複数回の環境の変化と突然の母子分離が不安を高め、それに対処するために愛着関係のできていた母への固着を強めて感情を落ち着かせる必要があったと考えられる。最初の安定型の関係性は環境によって不安定型の関係性へと変容し、内在化することが示唆された。

早期予防的介入の合理的な時期は生後2ヶ月前後ではないか

縦断的に個々の母子の関係性と児の社会性の発達をみていくと、生後1ヶ月では生理学的なリズムの形成を母子ともに試行錯誤しており、新しい事象に慣れることが課題であった。生後1ヶ月後半になると、児は一時的に視線を外界に向け、探索の開始や声を使ったやり取りの萌芽がみられた。生後2ヶ月になると母が乳児の笑顔を発見するようになり、生後2ヶ月後半になると乳児は見慣れないものを注視し、社会的微笑の萌芽がみられ、関係性に相互性がみられた。生後3ヶ月では筋緊張の発達により、母から身体を離し、対面で目を合わせやすくなり明らかにやり取りが成立した。生後4ヶ月では母と母以外を区別し、場の雰囲気も理解した行動を見せた。以上より、生後4ヶ月ではすでに母との関係性は特有なものになっている。そして や で明らかになったように生後4ヶ月の関係性は、環境がある程度安定していれば、3歳まで連続性を保つことが示唆された。

#### <引用文献>

- 厚生労働省乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連携による母子保健指導の在り方に関する研究班,2015, 標準的な乳幼児期の健康診査と保健指導に関する手引き～「健やか親子21(第2次)」の達成に向けて～, 平成27年3月 厚生労働省,p.11, [https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku\\_jouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/tebiki.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku_jouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/tebiki.pdf) 平成31年1月6日.
- Gratier, M., 2013, 赤ちゃんとお母さんの絆～声による伝えあい響きあいとすれ違い～, FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌,6,63-68
- Stern, D. N.,2015, The interpersonal world of the infant, Basic Books, U.S.A. (小此木啓吾・丸田俊彦監訳,1989, 乳児の対人世界 臨床編, 岩崎学術出版社)
- Ainsworth, M.D.S. et al., 2015, Patterns of Attachment; A Psychological Study of the Strange Situation Classic Edition, Routledge., N.Y. and London.

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計 1 件)

伊崎 純子、小林 順子、日本人母子の相互作用にみられる多様性 生後4か月児と母親の間主観性に着目して、日本乳幼児精神保健学会 FOUR WINDS 学会誌、査読有、第11号、2018、41-51

##### 〔学会発表〕(計 5 件)

Izaki, J. & Kobayashi, Y., What is the thing which we call Zero-stage intersubjectivity? : A study of Japanese mother and baby, 16th World Congress of WAIMH (Roma, Italy) 2018

伊崎 純子、小林 順子、乳幼児健診の場で関係性障害を早期発見するための試み(第4報)、日本乳幼児精神保健学会 FOUR WINDS 第20回全国学術集会、2017

小林 順子、伊崎 純子、「甘え」からみた日本人母子にみられる関係性の展開 4ヶ月から

1歳までの縦断的研究、第26回日本乳幼児医学・心理学会、2016  
伊崎 純子、小林 順子、乳幼児健診の場で関係性障害を早期発見するための試み(第3報)、  
日本乳幼児精神保健学会 FOUR WINDS 第19回全国学術集会、2016  
Kobayashi, Y. & Izaki, J., Development of relationships in the “Amae” as seen from  
Japanese mother and infant: A longitudinal study from four months to 1-year-old,  
15th World Congress of WAIMH (Prague, Czech Republic) 2016

〔図書〕(計 1 件)

伊崎 純子、小林 順子、自費出版、科研費報告書 関係性障害の予防を志向する基礎研究、  
2018、1-94

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小林 順子

ローマ字氏名：(KOBAYASHI, yoriko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。